

## 日本労働年鑑 1951年版(第23集)

The Labour Year Book of Japan 1951

## 第一部 労働者状態

## 第六編 農家の状態と農民の生活

## 第一章 農家

## 第二節 終戦当時の農家の状態との比較

つぎに、これらの農家の終戦当時における経営面積と自小作関係を見よう(第129表「調査農家の終戦時の状態」参照)。

内地の終戦当時当時五反未満の田畑を耕す農家は二、三三八、九九一戸が全体の三九%をしめ(四九年は四四%)五反から一町までは一、八〇四、四一六戸で三〇%(四九年は三二%)一町から一町五反までは九一〇、七〇八戸で一五%をしめている(四九年一五%)これに対し、終戦当時の一町五反以上の各階層の農家数は終戦時において四九年より多く、全体との比率においても同様である。

これによつて見れば終戦時と現在では、一町から一町五反までの土地を耕す農家層を境にして、それ以下の階層においては増加し、以上のものは減少していることがわかる。

しかし三七万八千余戸の新設農家を考慮して、自小作農別に経営面積による農家階層の変化を見ればつぎの通りである。

(第130表「終戦時と比較せる現在(一九四九・三・一)の農家の増減」は川上正道「農村分解の進行と特徴」経済評論一九五〇年四月より引用)

すなわち全農家を五反未満、五反一町、一町一二町、二町以上の四階層にわけると、一町以下の農家はすべて増加しているものの、新設農家を差引いて観察すれば戸数の増加した階層は五反一町のみであり、五反未満の階層は逆に減少している。これは、総体として五反未満の農家層の増加したのは零細な新設農家の激増(三〇三、二六八戸)によるものであり、五反一町の農家層における増加は、新設農家(五八八、八四九戸)によると同時に他面一町以上の農家の零細化によつて生じていることが推定されるのである。

日本労働年鑑 第23集/1951年版

発行 1951年1月1日

編著 法政大学大原社会問題研究所

発行所 時事通信社

2000年2月15日公開開始

